

原著論文

デイサービスを通じた要介護高齢者の「安心」を支えるケア
～小規模デイサービスの施設管理者に焦点をあてて～

**Caregiving in Day Care Facilities to Sustain
a Sense of “ANSHIN” of Frail Elderly
—Focused on Administrator of Small Day Care Facilities—**

岡本 麻由美 (Mayumi Okamoto)* 竹崎 久美子 (Kumiko Takezaki)**

要 約

デイサービスの管理者である看護師が、個々の要介護高齢者の安心したいというニーズをどのように捉え、それを踏まえたうえで小規模デイサービスを通してどのように支えているかを明らかにすることを目的とし、質的因子探索型研究を行った。

対象者10名のデータを分析した結果、デイサービスを通じた要介護高齢者の安心を支えるケアには、【日々の活力を維持する】【支援の隙間を埋める】【最期までの責任をもつ】【老老介護の介護者自身も対象とする】【支援する人をつなぐ】の5つのカテゴリーと18のサブカテゴリーが抽出された。

これらのケアを提供している管理者たちは、高齢者の健康状態と生活状況から、日々の生活を維持していきけるかの判断と、看取りまでの経過の予測的判断を行い、そのうえで、高齢者の生活の一部と化した生きがいや、高齢者の望む生き方に気づく力をもっていた。

また、デイサービスでありながら高齢者の24時間の生活を24時間支えるという責任感と、実行力、柔軟性を持ち、利用者の最期まで関わりたいという心構えでいることがわかった。

Abstract

This study aims to clarify the structure of recognition and practice of nurses working as administrator of day care facilities: how they recognize and meet the wish to feel at ease of the individual elderly persons who require nursing care. The data was analyzed using qualitative inductive method.

The result of data analysis of 10 clients reveals that there are 5 categories as follows: maintaining the energy for daily activity; making up for the vacancy of support; bearing responsibility to the end of life; supporting the family care givers who are elderly themselves; connecting the supporters.

The administrators seems to judge to which extent the clients can keep their daily life and what course they may take to their last moment, based on consideration of their health and life condition. Owing to such ability they are also capable of understanding the motives and hopes of life of elderly persons. Furthermore it is recognized that the administrators have sense of responsibility and flexible capability of supporting all day long the life of persons to be cared, with preparedness to work for them to the last moment.

キーワード：要介護高齢者 安心 小規模デイサービス

I. はじめに

急速に高齢化が進行している我が国において、在宅で過ごす要介護高齢者（以後「高齢者」という）が看護者に望むことは何であろうか。そ

のひとつに、「安心」して過ごしたいという思いがあるのではないだろうか。

『富山型』デイサービスの先駆者として広く知られている惣万は看護師であり、患者の「昼の上で死にたい」という望みを叶えたいという

*医療法人みずぎ会 訪問看護ステーションげいせい

**高知県立大学看護学部

思いからデイサービスを始めている。そして『誰もがいつでも、いつまでも、必要なだけ利用できるサービスを』をモットーにデイサービスを基盤に活動を続けている。また植田¹⁾は、「デイサービスは日常生活の一部の時間にしか関われませんが（中略）看護職がそばにいない時もその人自身が生活できる力をどこまで引き出せるかで、その人が在宅で生活できる期間は変わってくるし、質も変わってきます」と述べている。ここには、デイサービスを利用している時間だけではなく、生活そのものを支えていることが表れている。

以上から、小規模デイサービスの管理者である看護師は、施設運営のみならず、高齢者の生活そのものや、最期までの生き方をも支える役割を担っているといえる。このような看護者は、高齢者の安心したいというニーズを、どのように捉え、小規模デイサービスを通してどのように支えているのだろうか。

看護師であるからこそとらえることができる高齢者のニーズとは何か、管理者であるからこそ展開できるケアサービスとはどのようなものか、それらを明らかにすることで、高齢者が安心して生活することを支える看護への示唆を得ることができると考えた。

II. 文献検討

既存の研究において、高齢者の「安心」、「不安」、看護師が高齢者の安心をどのように認識し、それについてどのようなケアを展開しているのかをとらえるため「信頼」の上位シソーラス用語である「医療者－患者関係」というキーワードをもとに、医学中央雑誌で1983年から2010年1月までの文献検索を行った。しかし、高齢者がどのような不安を抱えながら生活しているのか、またどのようなことが満たされると安心して過ごせるのかという点を明らかにしている研究はなかった。

また、デイサービスやデイケアに従事する看護師の認識については、竹森²⁾が医療管理に対することや日々の身体的アセスメント、ケア提供者同士の連携などを看護の役割としてとらえていることを明らかにしている。植田¹⁾や小泉

ら³⁾がデイサービスやデイケアの場や人との交流が、高齢者の生きる力、意欲につながることを認識していることや、山口⁴⁾が「広義のターミナルケア対象者である」とらえ、（中略）、『今』をしっかりとケアすることが大切」と、いつもと違う気づきの大切さや広義の看取りにまで視野を広げていることも述べられているが、研究として明らかにされているものはみられなかった。

III. 研究目的

デイサービスの管理者である看護師が、個々の要介護高齢者の安心したいというニーズをどのように捉え、それを踏まえたうえで小規模デイサービスを通してそのニーズをどのように支えているかを明らかにすることを目的とした。

IV. 研究方法

対象者の語った内容を包括的に捉えるため、質的帰納的アプローチによる因子探索型研究とした。

1. 対象者

本研究の対象者は、小規模デイサービスの施設責任者でかつ看護師であり、①小規模デイサービスの運営とケア業務どちらにも携わっている者であること、②開設後3年以上実績を積んでいる者、③研究への協力が同意が得られた者であること、これらの三つの要件を満たす者とした。

対象者の選定は、専門誌等で情報を集め、開設後3年以上経過し、かつ管理者が看護師である小規模デイサービスの中から選定を行った。

これらの施設管理者に対して研究の目的・趣旨を説明し、研究の概要を理解した上で研究協力の同意が得られた12名を対象とした。

2. データ収集

対象者の語りを自由に引き出すために半構成的インタビューガイドを作成した。インタビューガイドは、対象者が高齢者の安心したいというニーズをどのように捉えているのか、またその

ことをふまえた上でどのようなケアを行っているのかについて、事例を通して語れるように構成した。在宅看護、地域看護の経験のある看護師、保健師あわせて3名を対象にプレテストを行い洗練した後、本調査を実施した。

データ収集期間は、2010年8月7日～10月9日であった。

3. データ分析方法

面接によって得られた内容は、同意を得て録音し逐語録を作成した。対象者が語った内容から高齢者の安心したいというニーズをどのように捉えているか、それを踏まえたうえでどのようなケアを展開しているかについて語ったと思われるローデータを抽出しコード化した。類似したコードを分類し、カテゴリー化を行い、そのコード・カテゴリーの特性を検討・分析した。

4. 倫理的配慮

研究参加者には、研究の目的、方法、プライバシーの保護、研究参加および途中辞退の自由、それらによる不利益が生じない事、研究に関する質問には随時回答することを保証した。面接の場所、時間は対象者の勤務、日常生活の時間に極力差し支えない時間帯を設定し、プライバシーが確保できる場所で行った。インタビュー時は本人の承諾を得て、内容をボイスレコーダーとミニディスクに録音した。

記録や研究の成果は、個人が特定できない形にまとめ、得られたデータはフラッシュメモリー等に入力し、大学内にある研究室の鍵つきの場所で保管し、外部に漏れることがないようにし

た。データは研究目的以外では使用せず、個人情報の保護に努めた。

尚、本研究を行うにあたっては、高知女子大学看護研究倫理審査委員会の承認を受けた。

V. 結 果

県庁所在地2市、県庁所在地以外の地方都市4市、都市近郊1市の小規模デイサービスの管理者12名から研究協力への同意が得られ、データ収集を行った。そのうち、結果的に条件を満たしていた10名のデータについて分析を行った。10名の概要は表1のとおりである。

1. 対象者の概要

10名の対象者は、看護師経験10年～50年で、小規模デイサービス設立後の年数5年～20年であった。半数の管理者は、小規模デイサービス以外の併設施設をもっていた。その事業は、介護保険制度では、居宅介護支援（居宅介護支援事業所）、短期入所生活介護（ショートステイ）、認知症対応型共同生活介護（グループホーム）であった。また、介護保険事業以外では、生きがい対応型デイサービス事業、障害者（児）の支援事業や乳幼児の一時預かりなどを行っていた。

対象者が語った事例の概要は、70歳代後半～90歳代前半の女性10名で、要介護度は1～3であった。また、1例は、利用者の夫も支援の対象者としており、その夫は、70歳代後半で要介護認定は受けていなかった(表1参照)。

表1 分析対象者の概要

	看護師経験年数	デイサービス設立後の年数
1	30年以上	5年以上
2	不明	5年以上
3	10年以上	10年以上
4	不明	5年以上
5	20年以上	5年以上
6	30年以上	15年以上
7	10年以上	5年以上
8	40年以上	5年以上
9	50年以上	5年以上
10	20年以上	5年以上

表2 デイサービスを通じた要介護高齢者の安心を支えるケア

カテゴリー	サブカテゴリー
日々の活力を維持する	健康管理をする
	より適切な医療を提供する
	生活の中のリスクを予測する
	活力を充足する
	本人が望む生き方を助ける
	デイサービスがいつでも支えていることを示す
	一人ひとりを尊重する
	チームで協力する
支援の隙間を埋める	日常の困りごとを解決する
	想定外の事態に対応する
	具体的に指示する
	24時間を見渡し続ける
最期までの責任をもつ	支え続ける存在でいる
	体制を整える
老老介護の介護者自身も対象とする	ガス抜きをしてもらう
支援する人をつなぐ	連携の要となる
	ケースが地域の人に支えられるようにする
	よい方向に発展することはまかせる

2. デイサービスを通じた要介護高齢者の安心を支えるケア

デイサービスを通じた要介護高齢者の安心を支えるケアには【日々の活力を維持する】【支援の隙間を埋める】【最期までの責任をもつ】【老老介護の介護者自身も対象とする】【支援する人をつなぐ】の5つがあることがわかった。概要を表2に示す。

1) 【日々の活力を維持する】

【日々の活力を維持する】とは、利用者が望む生活を、できる限り利用者自身の力で継続するために、利用者自身の活力を維持する支援である。この【日々の活力を維持する】には、〔健康管理をする〕〔より適切な医療を提供する〕〔生活の中のリスクを予測する〕〔活力を充足する〕〔本人が望む生き方を助ける〕〔デイサービスがいつも支えていることを示す〕〔一人ひとりを尊重する〕〔チームで協力する〕の8つのサブカテゴリーがあった。

〔健康管理をする〕では、ケース4は、身体症状の不安を訴えた利用者に対して、「苦しいんだったら少し横になりましょう」と10分程度安静にさせ、「ほらもうこんなに落ち着いたよ」と、バイタルサインを判定基準に改善したことを示し、本人を安心させていた。

このように、〔健康管理をする〕とは、身体

的なアセスメントにもとづいた健康管理を行い、それを利用者と共有することで安心してもらうことであった。

〔本人が望む生き方を助ける〕では、ケース6は、正月に実家に帰省する息子たちをもてなして迎えたい利用者の気持ちをくみ、「息子が来るっていっても、ばあちゃんにも用意できないし、それで私たちが（代わりに仕出しを）頼んだり、ばあちゃんちに一緒に行ってやってね（準備を手伝ってやる）」ことを語った。利用者が諦めていた正月準備を手助けすることで利用者の願いを具体化し、その安堵感が利用者の元気に繋がっていた。

このように〔本人が望む生き方を助ける〕とは、利用者本人が望んではいるが、それを家族や周囲の人たちに伝えられないでいる生き方を大切に、その実現を手助けすることであった。

また管理者は、利用者が自分の家族と物理的、心理的に距離があり、孤独を感じている不安をとらえていた。そして、〔デイサービスがいつでも支えていることを示す〕ケアを行い、利用者にもいつでも頼ってよいこと、いつでも支えになること、利用者を気にかけていることを示すことで、利用者が抱える寂しさが軽減されるように働きかけていた。

2) 【支援の隙間を埋める】

【支援の隙間を埋める】とは、利用者の24時間の生活の中で、支援が必要であるにもかかわらず、介護保険制度のサービス、介護者や地域住民からの支援が不十分な生活行動や緊急時の対応を、管理者が中心となって小規模デイサービスの枠を超えて支援することを指している。この【支援の隙間を埋める】には、「日常の困りごとを解決する」「想定外の事態に対応する」「具体的に指示する」「24時間を見渡し続ける」の4つのサブカテゴリーがあった。

〔日常の困りごとを解決する〕では、ケース5は、介護保険制度のサービスを新たに追加するまでではないが、ごみ出しができないケースに対して、デイサービスの迎えの際にごみ出しを一緒に行っていた。

このように、介護保険制度のサービスでは満たされない利用者個々のニーズにあわせた生活行動を、デイサービスの機能を活用しながら業務の枠を超えて支援することを〔日常の困りごとを解決する〕ために行っていた。

また、10名すべての管理者が〔24時間を見渡し続ける〕ケアを行っていた。すなわち、利用者がデイサービスを利用している間に得られた情報から、デイサービスに来ない間の生活や次のデイサービス利用日までの生活が継続できるかを予測・判断していた。

24時間を見渡し続けている一方で、財産管理など管理者の専門外の課題については、むやみに立ち入ることはしていなかった。いつでも介入できるよう、アンテナを張り続けてはいるが、その家族なりに安定している時には余計なことはせず、その家族の力を信じ、生活を見守っていた。

これらの4つのサブカテゴリーからなる【支援の隙間を埋める】ケアは、全てデイサービスの時間以外に行われている対応であった。

3) 【最期までの責任をもつ】

【最期までの責任をもつ】とは、利用者が望む場所で最期を迎えられるように、体制を整えることである。この【最期までの責任をもつ】には、「支え続ける存在でいる」「体制を整える」の2つのサブカテゴリーがあった。

〔支え続ける存在でいる〕では、ケース6は、利用者の終の棲家について考えており、「ばあちゃんが意識しっかりしていたら、最後はやっぱりばあちゃんが（どこで最期を迎えたいか）選ぶことやと思っている」「その時（今よりも動けなくなった時）になって、ばあちゃんの意見を尊重して、そして息子さんとか入れて、（終の棲家について）話し合いをしないとイケないのではないかと思っている」と、利用者が希望する場所で最期まで生活できるよう支援していきたい気持ちを語っていた。

このように〔支え続ける存在でいる〕とは、利用者に関わり続ける限り、できれば利用者の看取りの時まで、利用者の望む生き方を支え続ける存在でいようとするのである。

〔体制を整える〕では、ケース4は、集う人々やスタッフがなじみの関係となっている利用者にとって、デイサービスが居場所となっており、その利用者にとって大切な場所で最期までの生活を支援する方法を考えた結果、グループホームを新たに併設していた。ケース5は、「小規模多機能なら、認知症が進んでも、寝たきりになってもなんとか支えられるんじゃないかなー」と語り、利用者の緊急時の対応と、在宅で最期まで生きることを願う利用者を支えるために、今後の小規模多機能型居宅介護導入を計画していた。

さらにケース6は、デイサービス開設当初のことを「かなり細かく法律がなっていてね、それを『いっしょくたにしたい』（と役所の窓口）に言うたら、そんな法律はないと（言われた）」と語り、制度上の不備があったことを語った。そして、関わりはじめた利用者を在宅で最期まできめ細かく支援して看取るために、それぞれの方法にあわせてデイサービスの体制を自分で変化させていた。

このように、〔体制を整える〕とは、利用者の最期までをいかに支えていくかを考え、その考えに沿ってデイサービスの枠を超えた新たな体制をつくることであった。

4) 【支援する人をつなぐ】

【支援する人をつなぐ】とは、利用者に関わる人たちがつながることで、利用者への支援が

途切れないようにすることである。この【支援する人をつなぐ】には、〔連携の要となる〕〔よい方向に発展することはまかせる〕〔ケースが地域の人に支えられるようにする〕の3つのサブカテゴリーがあった。

〔連携の要となる〕では、ケース8は、自分の生活に精一杯で介護に加わらない家族に対して、「何回かやっぱり提案をして」と、家族にもかわり、家族の目を利用者の生活に向けるよう働きかけていた。

このように、〔連携の要となる〕とは、家族、他職種、管理者自身も含めて、利用者の資源となる人の気持ち、相互理解やケアの方向性をつなぐことであった。

〔ケースが地域の人に支えられるようにする〕では、ケース5は、利用者の近隣の人に、利用者への内服の声かけを依頼し、近隣住民が利用者のことを気にかけるようになるための意図的な働きかけをしていた。

このように、〔ケースが地域の人に支えられるようにする〕とは、地域住民によって利用者の在宅生活が支えられるように、地域住民と利用者の関係をつなぐことであった。

しかしその一方で管理者は、人間関係やスタッフが行うケアで、利用者にとってよい方向に発展することは当事者にまかせ〔よい方向に発展することはまかせる〕ことをしていた。

5) 【老老介護の介護者自身も対象とする】

【老老介護の介護者自身も対象とする】とは、利用者の配偶者が高齢で支援を必要としている場合、その配偶者もケアの対象者としてとらえ、ケアを提供することである。この【老老介護の介護者自身も対象とする】には、〔ガス抜きをしてもらう〕という1つのサブカテゴリーがあった。

ケース8は、ある利用者夫婦について、介護を担っている夫の方が介護や経済的に先行きが見えない現状に疲れきっており、不安を抱えていると判断し、夫もケアをする対象としてとらえ、自費でデイサービスに通所してもらっていた。

管理者は、口の重い夫が唯一身の上話をするのが散歩の機会であることをとらえ、夫に気分

転換の散歩を勧めると同時に、話の聞き役として必ず職員を一人専属で付き添わせ、夫が気持ちを吐き出せる時間を提供し、〔ガス抜きをしてもらう〕ことをしていた。

VI. 考 察

1. デイサービスで支えられている安心

1) 健康管理

生活障害を持ちながら地域で暮らす高齢者の心的過程について調査した長江ら⁵⁾は「自己尊重感を保障する健康」として健康をとらえている。健康は高齢者自身が望む生活をその人自身の力で送るために、欠かすことができない。結果の〔健康管理をする〕ケアは管理者のほとんどが行っており、看護師の使命である健康管理は、高齢者の生活に欠かすことができず、管理者もそれを大切にしていることがわかる。デイサービスならではの看護師の働きとして植田¹⁾は、「長時間独りの看護職がみることが適切であると判断した場合」にデイサービスの利用を勧めることを述べていた。これは、利用者が数時間そこに滞在するからこそできる健康管理があることを示しているのであろう。看護が関わる介護保険サービスのなかで、一回の利用時間が長いことは、デイサービスの特徴であり強みであるといえる。

高齢者の真のニーズをとらえた健康管理は、和田⁶⁾が述べているように、『『できる限り自分で行う』方向性や『精一杯生きる』目標をもち人として自立していきたい気持ちがある』利用者にとって、生活を維持するのみならず、生き方そのものを支えられる安心につながっていると考えられる。

2) 支援者をつなぐ効果

管理者は、【支援する人をつなぐ】で示したように、家族や地域住民との間を積極的につないでいた。古谷野⁷⁾は、地理的近隣性を契機とした付き合いが、知り合った後の関係の継続・発展につながると述べており、近隣に住む人々が細かな支援の担い手になるだけではなく、情緒的にも高齢者の支えになる可能性がある。管理者は、フォーマル、インフォーマルな支援者

をつなぐことで、支援者がいつでも支えているというメッセージを送り、利用者自身が自信、価値、強さを感じて生きていくことができるように関わっているといえる。こうして利用者は、日々の生活を生きる活力を得られるのであろう。

また、管理者たちの働きかけは、これから高齢者になる近隣の人々の準備性を高め、支えあう地域をつくることにもつながっているのではないだろうか。未来の高齢者が安心して地域で生活を続けられる基盤をもつくっているとみえる。

2. 管理者がもつ資質

1) 備えるべき力量

今回明らかとなった【支援の隙間を埋める】と【最期までの責任をもつ】ケアは、管理者たちが次の二つの時間的経過を予測する力を持つことを示していた。

まず一つは、次回のサービスを利用するまでの間、生活を維持していけるかどうかという視点である。管理者達は全員、デイサービスにいる時間を通してケースの〔24時間を見渡し続ける〕判断を行っていた。サービス利用中の身体状況を判断するだけでなく、会話や送迎の機会、あるいは他職種からの情報をもとに家での状況を把握しており、エキスパート性の高いアセスメント力をもっていることが理解できる。

もう一つは、【最期までの責任をもつ】ための看取りまでの経過の予測である。これには、いつまで、どこでどのような生活を維持することができるか、どこで生活を送ることがその人が望む生活に一番近いのかを考えなければならない。

小笠原⁹⁾は、病院のようにすぐ誰かに相談することができない在宅の特殊性から「どれだけ先を見越した予測的判断ができるかが重要」であることを述べている。しかし、これらの予測的判断ができたうえでさらに必要なのは、一人ひとり異なる、高齢者の生活の一部と化した生きがいにも気づくことではないだろうか。高齢者が自己の有用感をもつことや、他者との情緒的な関わりにより自己の存在意義の確認をすることは、高齢者自身がその先の人生を自信、価値、強さを感じて生きていくことにつながる。

【日々の活力を維持する】ために〔本人が望む生き方を助ける〕では、本人の気持ちを具体的な行動にすることを助け、得意なことを通して活躍してもらっていた。そのためには、人と人としての関わり合いができる力、高齢者の望む生き方に気づく力が求められるのである。

予測的判断をする力、高齢者の望む生き方に気づく力をあわせてはじめて、その人の支援の隙間に気づき、【支援の隙間を埋める】ことができるのであろう。

2) 管理者たちの覚悟

今回の研究で、介護保険制度を駆使した支援には支援の隙間があり、それを管理者が様々な方法で埋めていることが明らかとなった。

管理者がこの支援の隙間に気づき、それを自ら埋めていたことが、今回の管理者が行っていたケアの特徴であるといえる。急変時や想定外の出来事といった高齢者の生活を揺るがす事態が起きた時、管理者は自ら行動し対応していた。その行動には、サービスを利用している時間帯だけではなく、利用者一人ひとりの24時間の生活全体に対する責任をもち、それを引きうける覚悟が表れていると考えられる。また、それを実際に行動に移す実行力と、小規模デイサービスだからこそ柔軟性によって実現できている。この【支援の隙間を埋める】ケアは、その管理者がもつ高齢者を支える上での覚悟と、即行動する実行力、そしていかなる事態にも対応できる柔軟性が支えているといえる。

これらの枠にとらわれないケアは、管理者自身がどこまで枠を超えて支援するかを決定しており、それには管理者の考え方が反映されている。こうした責任を引き受け、柔軟に支援していくことが、管理者たちが目指す「安心」を支える支援なのである。

3. 高齢介護者の支援について

筒井⁹⁾は、「介護者は、一時的に介護から解放されることのみでは、介護者の負担を本質的には軽減しないのではないか」と述べている。今回の【老老介護の介護者自身も対象とする】ケアは、利用者・介護者双方のニーズを満たすことが、生活が破たんしそうで苦しむ介護者だけ

ではなく、介護されなければ生きていけない利用者自身のことでも支えることにつながっていると考えられる。そして、竹内¹⁰⁾が述べているように「明日はどうなるかわからない」という思いを抱えながらも、この先も支援してくれる人がいてくれると思えることが介護者の安心となり、介護負担感を軽減させるのではないだろうか。

これから高齢者世帯が増加することは免れない。それらの世帯がすべて、要介護者、介護者共に介護保険が利用できる状態にあるとは限らない。しかし現行の制度では、要介護認定が下されない介護者に対しては、サービスの手が差し伸べられる体制が整っているとは言い難い。管理者たちはここでも柔軟な対応で高齢者たちの安心したいニーズを支えているのである。介護予防の意味でも、今後制度の中でこれらの活動が展開でき、支援としても成立するようになることが望まれる。

4. 今後の発展

〔連携の要となる〕支援では、家族、多職種、管理者自身も含めて、利用者の資源となる人の気持ち、相互理解やケアの方向性をつないでいた。

管理者たちは、デイサービスを基盤として、自らがケアを行う資源となりながら、利用者の安心したいニーズを満たすために人々をつないでいたのである。

今井ら¹¹⁾はネットワーク組織論の中で「ネットワーク・メンバーの自発的行動がマクロレベルのまとまりに圧縮されるためには、それを誘導するような何かしらのメカニズムがなくてはならない」、加えて「構成員各自の主体性に基づく行動も、それを束ねるメカニズムなしにただバラバラに行われたのでは単なる混沌状態を引き起こすだけであろう」と述べている。このネットワーク・メンバーを直接的なケア提供者とすると、介護保険サービスを一つの方向にまとめ、誘導する役割を担っているのはケアマネジャーであろう。しかし、高齢者が求めるニーズは、【支援の隙間を埋める】で示されたような日々のちょっとした事柄、すなわちミクロの部分に及ぶため、サービスにつなげられないニ

ズに関して、ケアを担う側にも【支援の隙間を埋める】ような動きを主体的に行うケア提供者がいることの存在意義がそこにあるといえる。

今回の管理者は、サービスを細分化せずに、一つのデイサービスチームという核を基盤にして支援を展開しており、そのことでメンバー同士の意思疎通もはかりやすく、ミクロの部分のケアを足並みを揃えて行うことができるのであろう。

機能分化している介護保険のサービスは、様々なサービス提供者が部分的に役割を担うことでケアプランがつながっている。そのシステムをコーディネートするためにケアマネジャーの働きは欠かすことができない。しかし、高齢者が支えてほしい安心したいニーズは、日々のミクロの部分や、緊急時の臨機応変な対応にこそある。

今回の管理者たちのような司令塔となれる人材づくりと、実際に日々関わるケア提供者が、柔軟に活動を行ってもカバーしうる柔軟な保険制度のしくみづくりが今後の大きな課題であると考えられる。ケアプラン以外での臨機応変な支援を行えるようなしくみづくりは、要介護高齢者の在宅生活を支えるうえでの大きなテーマであらう。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究では、対象者の背景の相違として併設施設の有無があった。また管理者自身の持つ理念にも違いがみられたが、それが要介護高齢者の安心したいというニーズに対する考え方に影響しているか否かまでは明らかにできていない。また本研究から得られた新たな研究課題として、24時間の生活を予測的に判断する看護師の視点や判断に注目した研究の必要性などが明らかとなった。同時に、高齢者自身に対しても安心したいニーズについて尋ねる研究を行う必要がある。

今後ケースを増やし、研究成果を精練していく必要があると考える。

謝 辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆様、ならびに対象施設の皆様に心より感謝いたします。

尚、本研究は平成22年度高知女子大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正をしたものである。

<引用文献>

- 1) 植田佳代：「生きがい」のあるデイサービスをめざして、コミュニティケア、10(7)、24-27、2008.
- 2) 竹森幸子：デイサービスにおける看護活動の現状と課題、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録、34、270-277、2009.
- 3) 小泉恵、竹内里絵子：限られた時間の中で問題を予測するプロの視点、コミュニティケア、10(7)、20-23、2008.
- 4) 山口茂美：前向きに生きられるように気持ちを支える“ぼこまめ流看護”：コミュニティケア、10(7)、2008.
- 5) 長江弘子、千葉京子、中村美鈴ほか：生活障害を持ちながら地域で暮らす高齢者に関する研究「生活の折り合い」を見つけるまでの心的過程、健康文化研究助成論文集、6号、98-107、2000.
- 6) 和田昌子：在宅における高齢者の日常生活

のマネジメント、高知女子大学看護学会誌、27(1)、68-76、2002.

- 7) 古谷野亘、安藤孝敏：改訂・新社会老年学、ワールドプランニング、131-138、2008.
- 8) 小笠原充子：訪問看護師の行っている予測的判断、高知女子大学看護学会誌、28(2)、21-31、2003.
- 9) 筒井孝子：在宅サービスの利用が家族介護者の介護負担感に及ぼす影響に関する研究 訪問介護、通所介護、短期生活入所介護別サービス利用の効果、訪問看護と介護、15(8)、630-639、2010.
- 10) 竹内孝仁：医療は「生活」に出会えるか、医歯薬出版株式会社、161-170、1995.
- 11) 今井賢一、金子郁容：ネットワーク組織論、岩波書店、207-218、1988.

<参考文献>

- 1) 惣万佳代子：笑顔の大家族このゆびとーまれ「富山型」デイサービスの日々、株式会社水書坊、2002.
- 2) 惣万佳代子：地域密着サービスの現場からこのゆびとーまれの取り組み、月刊総合ケア、17(4)、45-48、2007.